

「四国遍路の旅」 挿入曲詩編

[illegible]

遍路風

ふるさとの菜の花畑に 鈴の音が響く頃
遠い空から呼びかけられるように 春風が動き出す
この風に乗って歩いていけば…
光る浄土にたどり着くという
春風よ…白い遍路風…旅も苦しみも溶かしてゆけよ

青い空すげ笠の向こう 白い雲浮かんでは消えゆく
 まぶしい陽射しに新しい旅は 言い知れぬ情景
 傷ついてきたころも体も…
 この風に安らげておいき
 春風と…八十八の… 遺跡を巡る巡礼

白い衣は しみついた暮らしと
 どうにもならない はかない人生
 捨て果ててゆく 捨て果ててゆく あの旅人の風に…

川の流れがチロチロきこえる 山間の小さなお寺で
はるかにつつく緑の野辺を 見つめ話してくれた人
ふるさとの小さな島を…
散歩するそんな涼しさ
今・ここは…宇宙の楽園… 君も神戯の旅人さ

ひとりの人を信じ 激しい急坂も
いとわず幾日も 幾日も歩く

移り変わる景色も 流れゆく月日も
忘れていくだけの白い風の中…

歩いてることしかわからないで 風に狂った旅人のように
訳もなく石段を登りつめては 両手合わせた子供のように
あなたの苦しみは… 何処で消えるの
祈りつづけた声は… 確かにひびくのか
遍照尊…南無遍照尊… 遍照尊…南無遍照尊…



お遍路さん

山の緑はこの目を洗い 野辺の細道 草の香りが
お遍路さん 風が呼んでる お遍路さん 花がほほえむ

白い姿のあなたは何処へ 清き鈴の音 樹々の葉は揺れ
お遍路さん 通り過ぎ行く お遍路さん 語るひととき

空の青さに この世を忘れ 海の波風 ほほを撫で行く
お遍路さん 振り返るとも お遍路さん 歩き続ける

まだ見ぬ夢と 道は遥かに 山門を越え つむぐ祈りよ
お遍路さん 長い雨にも お遍路さん 星は流れる

お遍路さん あなたの祈り お遍路さん 叶う日を呼ぶ
お遍路さん 四国路の風 お遍路さん 彼岸への旅



ポータラカ 補陀落迦

明るい空の南の国 風は海から 野をよぎる
緑の丘を縫うように 最果ての地へたどりつく
空の向こうは海の線 波の音響く 鈴の音も
香る陽射しと樹々の葉に 揺れる遥かなポータラカ
波の彼方に目をやれば 何故かやさしい声がする
ビロードの 南風… 足摺岬…土佐の果て

断崖に立ち見る海は 荒れ狂う波 走る波
切り立つ岩を打つように 夢は逆巻き はじけ飛ぶ
闇に消されて浮かばれない 金剛福寺の 鐘の音よ
続く旅路を照らせるか 祈り遥かなポータラカ
海に向かって話してる 幻のような人がいる
ビロードの 南風… 足摺岬…土佐の果て

波の彼方を吹いている 何故かやさしい声がする
三面千手観世音 その手で僕を包んでおくれ
黒潮が行く流れる海 君といつかは ながめたい
これから旅は何処へ行く 巡る遥かなポータラカ
二日目の宿 明日は出る 唐人駄馬をあとにして
ビロードの 南風… 足摺岬…土佐の果て



無 空

山を渡る風の音 広い空を
揺れる緑の景色は ながめ尽きない
人生は遍き… 暮らす街も仮の世
乞食の人は見た …無常の調べ

家もなき行き場所も 風に吹かれ
いくたびかの四国路 今日も門に立つ
人生は遍き旅… 誰もがいつかは逝く
乞食の人は見た …無尽の祈り

生まれ生きる命の 人は何を
死んで死する命の 空しさに会う
人生は遍き旅… 自然の息吹に触れ
乞食の人は見た …光の里を 光の里を…



聖地を巡り 祈り歩く 巡礼遍路の姿



菅笠



(天蓋)

死者を収める棺桶のふたに書かれてある霊文
・迷放三界域・悟故十方空・本来無東西
・何処有南北(弥勒菩薩の梵字・同行二人)

白装束



(死装束)

極楽往生を願って 死者に着せる真っ白き衣
破れのない 真っさらな気持で旅立つこと祈る
(背中には大師の梵字とご宝号と同行二人)

金剛杖



(碁標)

生き倒れ 命が果てた時の
ストウパーへ自然への回帰
(遍路は大師と見立てる)

空
風
火
水
地



四国八十八ヶ所霊場会のポスター

四国遍路…天蓋をかぶり、死装束をまとい、碁標の杖を持って、死出の旅をゆく

山河はるか

山河は 遙か 野の風に吹かれ
草も樹もそよぐ 世の果ての道を
広い空 高く 白い雲の流れ
杖の音と鈴が 森に響いてゆく
巡礼へ光を… 空よ… 海よ… 風よ…
旅人へ希望を… 八十八の師よ…

街なみ 遠くに 見渡せる丘で
座ってたただ何を 願っているんだろう
来たる日も 過ぎて 忘れられてしまう
このまま何処へ旅を 行けばいいんだろう
巡礼へ光を… 空よ… 海よ… 風よ…
旅人へ希望を… 八十八の師よ…
四国路を巡る… 空よ… 海よ…風よ…
行く道へひかりを… 八十八の師よ…



空 風 火 水 地
キャカラバア

何処までも続く道を 君は何処へ向かって歩いてゆく
果てしない空と海 鈴の音が響いてゆくへんろ道
緑なす野辺を揺らして 山の辺の森の中にも
吹き渡る風の歌は 幾億の祈りを散りばめて

キャカラバア 遍き路を 駆けてゆく光の射す道へ
キャカラバア 生き倒れるまま この杖と歩こう

旅をゆく 全てを捨てて 行き場のないこの身を風にして
愚かさよ あわれな夢 死の国を巡りつづける 死装束
誰にも話せやしない 命がけで雨に叫んだ
荒磯の崖の上から 飛び降りる勇気があるのなら

キャカラバア 遍き路で 愛する人と出会えれば
キャカラバア 歩き始めよう この次の札所へ

生まれもない言葉を離れ 焼き清め振り払らえる空がある
菩提は今 悲しみから 変えてゆく力を送っている
苦しみを抜いてください 楽しみを与える如来
暗闇に光が舞えば 行く道にしあわせが続くように

キャカラバア 遍き路を 同行二人の納め札
キャカラバア 君の悲願は きっと叶うよう…



捨身ヶ道

四国の霊場を 周るお遍路 すげ笠白い衣 鈴を振りしめ
祈りの道にひとり 風に吹かれて

還る日あてのない 旅の巡礼

一番札所 靈山寺 菩提の祈りあらためて

太龍の岳 室戸のいおり 遍照尊の夢しのぶ

荒波土佐の海 寄せては返し 遥かな空を仰ぎ杖を力に
清滝しずく音 春も夏も秋も

広がる野辺にこそ 密蔵浄土

修行の土佐路 足摺へ 四国最南 補陀落や

ここは岬の舟のさお 取るも捨つるも 法の山

風吹き荒れる 南無不動 降魔成道 さいはてへ

西海 観世音 薬師 大日 岩屋の松風に 遊ぶ仙女よ
雨の日濡れながら 絃を唱えて 真実祈り出す 石鎚の峰

遠くかすんだ 瀬戸の海 捨身ヶ道に果てなんと

雲のほとりの 寺に来て 月日を今は はるばると

野宿の夜を明かし 服はかすれて

過ぎ行く五剣山 大慈大悲の

生き死ぬ浮世のチリ 穢れ祓いて

涅槃の結願所 大窪の寺

八十八の御仏を 拝みて巡る 世捨て人

…高野の里は 雪の中 響く御詠歌 護摩の火に

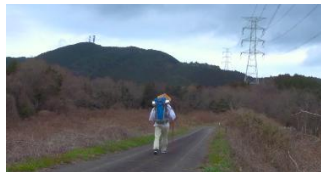
揺らり揺らめく世の命 遍照尊の御声する…

風の祈り

人知れず山の奥に たたずむ石の仏
森の木そびえ立つそば 風が通りゆく…
苔むす岩肌をおおう 笹の葉の香りにゆれ
伝える風の祈りは 巡礼者への歌
幾く年も 行く年も 旅人へ祈る
あとわずか あとわずか… 八十八の地へ

四国の山あいを縫い 旅する白い人よ
あなたの祈りと共に 私の願いを…
はるかな山河に響く 鈴の音の便りに乗せ
いつしか風の祈りは 遍路道をゆく
幾く年も 行く年も 旅人は祈る
行き倒れ 叶わぬ夢を… 届けてください

幾く年も 行く年も 風だけは巡る
死に果てて 蘇える 八十八の地で
幾く年も 行く年も 旅人へ祈る
あとわずか あとわずか… 八十八の地へ



涅槃路

霧の畔りで 過ごした夜 闇を照らして光が昇る
石段のそばに 大木の葉が 伝説のように舞い降りる

砂浜をゆく 琴の音の海 波がいつしか足跡を消す
山門の向こう 風の白馬が 百八の坂を駆け貫ける

あおぐ 捨身ヶ岳 空は遠く近く
深い谷の底から 湧き上がる風

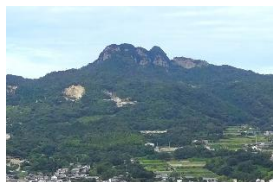
屏風ヶ浦の 静かな峰 巡る地下ろう消えゆく姿
救いを誓った 始祖の祈りが 心の奥へと揺れ響く

旅はひと月 過ぎてゆくなか 変わり果てゆく祈り向く道
観世音菩薩 千の手に持つ 風車を回して風がゆく

巡る 五色の峰 深い森の道を
変わるヒカリ間近に 祈りつづける

補陀落の地に たどり着いたと 四国はいつか密厳浄土
手を合わす先に 開く蓮華は 不可思議の彼方サハスラ

向かう涅槃の地へ いのち歩くままに
とこしえの御光… この身を貫けて…
ニルヴァーナの里に 杖の音が響いてゆく
とこしえの御光… この世を貫けて…



高野の朝

霧けむる朝…高野のしずく 杉木立を風が 通り抜ける
ほのかな光さし込む陽射し 流れ行く霧はもう大空に帰る
湧き上る水せせらぎの音 絶え間なく山々を潤おすように
庭先の花 綻びかけた 星の夜の夢はもう 静けさに消ゆ
昨日まで 歩いて来た道は
光の如来に 出会うために舞い
生きてゆくことを 朝に告げていく
高野の山里に…祈りが響く

緑まぶしい 朝風の路 一の橋の灯りは 奥の院へ
旅に疲れて 訪れた日は 降りしきる雪の日や満月の夜
思い出すのは 白い巡礼 山々を慕っていた 旅人の杖
聳える樹々が石の墓標が 木漏れ日に迎え立つ光の如来
希望へと 呼び続けていた人は
君の未来を 祈る旅の風
生きてゆくことを 朝に告げていく
高野の山里に…祈りが響く

山河の気流 五智の莊嚴 そのままの故郷は豊かにて在り
天食天衣 雨は自然に 無為無事に帝功をも忘れて
去来大空 師は一身に 三密は塵滴に過ぎ 遍き世々に
身を捧げば智火は放たれ 留まらず不生不滅三劫を越え
何処までも 光の路をゆけ
ビルシャナ如来の声を聴くように
生きてゆくことを 朝に告げていく
高野の山里に…祈りが響く

雪の中の春

静かな山に雪が降る いつしか小道を埋め尽くして
真白く 真白く 空も…風も…山も…
そびえ立つ木立から葉音がする しずく光った玉川の
凍てついた 谷間の沢には わずかなせせらぎが
語る声も 歩く道も 寒さも忘れて
たたずんだ巡礼者 高野の奥の院
マハーヴィルシャナ 悲願の果てにある
マハーヴィルシャナ 悲願の果てにある

春の光がそよそよと 白一面…空に包まれた風
まだ見えぬ はるかな 菩薩のまぼろしか
四国遍路を歩いた人は 長い旅路を振り返った
生きていた 只この今を 涙がかすめていく
苦しみは 悲しみは 癒されているよと
何処からか響く声 高野の奥の院
マハーヴィルシャナ 悲願の果てにある
マハーヴィルシャナ 彼岸の果てにある

生きるすべも 死ぬるすべも 雪の中の春…
溶け入るような旅の日よ 消えて行くその前に
マハーヴィルシャナ 春を呼べ 春を呼んで
マハーヴィルシャナ 白き花が 降る山
マハーヴィルシャナ すべての 苦悩を癒し
マハーヴィルシャナ…光の命の歌を……

